

地球の極を究める

⑭

天体観測にはあまり向かない。「ドームふじ」に天文台を造れば、研究成果で米国を逆転するチャンスがある」

そう思った中井は〇四年一月、野辺山から国立極地研究所副所長の江尻全機

(65)を訪ねた。江尻とは九〇年九月に野辺山で会って以来だった。

十四年前、江尻は「五年後に内陸部の高地に基地を造るので、そこで(天文台を)やってみませんか」と誘った。中井は心を動かさ

知られるところとなった。だがほとんどの天文学者は冬、氷点下八十度を記録したドームふじに望遠鏡を持って行って「動くのか」と冷ややかな視線を送った。〇五年十二月、援軍が現れた。南極に赤外線望遠鏡を持ち込もうと考えていた東北大学教授の市川隆(56)が電話をかけてきたのだ。

中井は電波望遠鏡で星が生まれたころの初期の銀河を観測しようと考えており、望遠鏡の種類は違ったが、夢の実現に向けスクラムを組むことにした。こうして南極天文コンソーシアムが結成された。

中井はまず直径三十センチの小型望遠鏡を一〇年に南極に持って行き、その後、直径十センチの望遠鏡をつくる計画を立てている。

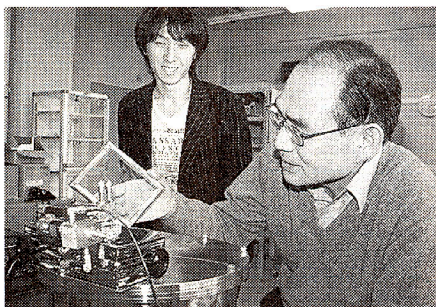
現在、小型望遠鏡の開発を進めている。今秋、望遠鏡が完成したら、アルプス山脈かアンデス山脈に運び、天の川の北側を観測するといふ。

地球で宇宙に開かれた最後の窓といわれる南極。天文台を造る夢が実現に向け動き始めた。 〓 敬称略 (編集委員 西山彰彦)

南極に天文台を造ろうという青写真を最初に描いたのは、筑波大学教授の中井直正(53)だ。チリのアンデス山脈に建設中のアルマ望遠鏡計画などを引っ張ってきたつわものだ。

二〇〇三年十一月十四日の夜、国立天文台から筑波大学に移ることが決まった中井は、野辺山の研究室で「これから何をやるのか」と考えていた。そのとき、ふと十四年前のことが頭によみがえった。

一九八九年、野辺山天文台で教授をしていた海部宣男(64、元国立天文台長)のもとに米国AT&Tベル



長年の夢だった南極向けの電波望遠鏡の試作に取り組む中井氏(右)

南極に天文台を

初期の銀河観測

実現へスクラム

南極は地球上でベストだ」宇宙からの電波は微弱だ。大気中の酸素や水蒸気が多いと電波が吸収されて観測できなくなる。南極のドームふじ基地は寒く標高も高いので、酸素や水蒸気が極めて少ない。

南極での天体観測では米国が南極点のアムンゼン・スコット基地に天文台を造って先行している。だが標高がドームふじより一千層ほど低く大気の透過率など

れたが、アルマ天文台の建設に向けて奔走しなければならず、後ろ髪を引かれる思いで南極天文台構想を断念した記憶がある。

江尻と再開した中井は所長の藤井理行(61)とも会い、手応えを感じた。

南極天文台構想は学界の

ドキュメント

挑戦

地球で宇宙に開かれた最後の窓といわれる南極。天文台を造る夢が実現に向け動き始めた。 〓 敬称略 (編集委員 西山彰彦)